

## 【A】保育実践のマインド&スキルズ編

### 【第6回】障害児の保育



鎌倉女子大学短期大学部 准教授 中村 真一

#### 【講座の概要】

保育の現場では、さまざまな困難さや弱さを感じている子ども、気になる子どもに出会うことがあります。日常生活において子どもの多様性や特徴を認め、その子らしさがみんなに理解され、一人ひとりが伸び伸びと育ち、関わり合い、互いを理解して助け合い成長していく保育、インクルーシブ保育の視点が重要となります。この講座では、障害のある子どもの中でも、人との関わりが希薄であったり、興味・関心が限定されていたりする発達障害のある子どもに関する基礎知識と応用を学ぶこととします。

#### 1. 障害のある子どもの位置づけ

保育所保育指針、幼稚園教育要領、幼保連携型認定こども園教育・保育要領において、障害のある子どもが他の子どもとの生活を通して成長できるように明記されています。

・「ちょっと気になるあの子へのアプローチ」

#### 2. 発達障害のある子どもの特徴

社会的なコミュニケーションの難しさや対人相互反応の希薄さ、限定された反復的な行動や興味、活動があげられます。

・「レディーを育てる親と支援者たち」

乳幼児期（幼稚園・保育所頃まで）

- ・おとなしくて、手がかからない子、反対に癪が強い子
- ・抱っこを嫌がる、視線が合いにくい、特定のものしか食べたがらない
- ・言葉の問題（言葉がなかなか出ない・オウム返しが多い等）
- ・玩具本来の遊び方よりも、並べたり眺めたりすることを好む
- ・集団行動（お遊戯など）の場面で、他児と同一の行動ができない

#### 3. 発達障害のある子どもの援助

早期発見、早期療育

どのような障害のある子どもでも、その発達の予後を左右するのは、早期に障害に気づき、療育を開始することです。たとえば、発達障害の特徴の一つに挙げられる視線の合いにくさです。視線を合わせることは、他者とのコミュニケーションを結んでいくことの土台となります。指をさして物を要求するなど、他者と注意する対象を共有する共同注意では、同時に生じる言語生成にも重要な働きを担っています。他者の視線を早期にとらえることがコミュニケーション発達に大きく影響します。保育者が子どもと一瞬偶然的に一致した視線を察知し、ほめるなどの心地よい刺激を強化するフィードバックを与え、繰り返すと蓄積がやがて自発的な他者と視線を結ぶことにつながっていく第一歩となります。



【参考資料】神奈川県発達障害支援センターかながわA(エース)

・「発達障害のある人と支援者のために」